

ふるさととのつながりは



自分がいた場所・ふるさとへの今の思い

アンケートでは9割弱の若者が、震災前に自分が住んでいた地域の現状を「知りたい」と回答しています。10年が経過し、生活基盤は避難先になっていても、子どもの頃に好きだった場所や、仲のよい友だちや親戚がいる地元とのつながりは、今後も持ち続けたいということなのでしょう。一方で、放射能の影響への不安や、避難しなかった人との間には、言葉では表せない複雑な思いを抱えている人もいます。

子ども・若者の声

- 最初はすぐにでも帰りたかった。中学になった頃から放射能が危ないという認識もするようになり、廃炉のニュースや福島の実状を見聞きして、高校進学くらいにはもう帰れないんだなと思った。でも、現実には難しいけれど、福島での就職情報なども知りたいと思っている。
(福島県いわき市:現在大学3年生)
- 高校は楽しくなくて、やめて通信制高校に行くか、福島に帰るかというのも考えたことがある。福島は自分のいた町だし、親戚や娘のように接してくれる伯母さんもいるから、一人で戻っても居場所がある。福島にいるみんなにとっても会いたい。
(福島県国見町:現在大学1年生)
- 自分たちを連れて福島に戻るという考えは父にはない。町役場の線量をみるとまだ高いと思う。自分も心配ではあるけれど。
(福島県国見町:現在高校1年生)

311県外避難者について考えよう